

girl meets ossan.

佐溝貴史

[コメント]

ちょっと気になってきた人、別れを言おうとしたら、向こうが先にいなくなってしまう。

[配役]

女
あの人
変な人

明転

女　　いつも朝バス停で会うあの人。

あの人、出てくる。バスを待つ列に並ぶ

女　　最初は、たまに目が合うだけで、特に意識しなかった。どうせうだつのあがらないそのへんのサラリーマンなんだろう。

あの人、女、目が合うが、それだけ。特に何も無い。

女　　急いで家を出てきたのか、バスを待つ間にパンを食べたりしている。ごく普通の人だった。

あの人、はける

女　　だけど毎日会っていて、どちらが先だったのかわからないけれど、ある時からあの人のことをちょっと意識するようになって、結構様子がおかしい人だということに気が付いた。

あの人、再び登場。でかい食パンを食べている。

女　　食パンが大きすぎる。何？どこで買ってるの？

あの人、女、目が合うとあの方はそそくさとカバンにパンをしまいこみ、はける。

女　　しまっちゃうの！目が合うと、その人は恥ずかしそうに食パンをカバンにしまいこんだ。

女　　（うそ）でも全然面白くないし気にならない。

女 (思い出して) 食パン大きいよ。(軽く笑う)
また少し季節が進んで秋も深まってきたある日。

あの人、登場。極限まで袖や足をまくっている。

女 まだパンを持っていた。カビないの？山崎パンなの？
そんなことより寒くないの？まくりすぎでしょ。多分ほんとは寒かったんだろう、あのひとは
ずっとくしゃみをしていた。私も風邪をうつされたのかもしれない、(くしゃみをする) その
後数日してひどい熱が出た。
あのひとのことがちょっと嫌いになった

あの人、登場。手がでかい。

女 気のせいかと思ったが、手が大きくなっていて。
これ絶対取れる。
思わず手に触れそうになった

あの人 (触れられそうになったことに気づき。高い声で) わあああ (逃げていく)

女 あ！待って！ごめんなさい！

あの人 (手をちぎって逃げていく)

女 (手がちぎれたことに驚き) やっばりとれた！・・・(手を取り、かるく笑う) トカゲか。

女 次はちゃんと声をかけよう。そう思った。

女 なんて声をかけようか。この手を返した方がいいんだろうか。ちゃんと会話できるだろうか。
声高かったなー。手はどうなっているんだろうか。あの子のいろんなことを考えた。

あの人、登場。女の後ろに並ぶ。女、気づく。襟、袖口、ベルト、ポケットチーフはしている。あとは
ランニングシャツ。

女 あの…！(カバンと手を渡そうとして絶句)

女 手は元に戻っていた。でもそんなことは些細な問題だ。サラリーマンとしてのバランスがおか
しくなってきた。 (軽くうなずき) 私は意を決して声をかけた。

女 あ、あの！これ！手とカバン！(すごい力入っている)

女 緊張しすぎて私の方が変な人みたいになってしまった。

あの人 (女の手を取り、指と指を合わせ) けんご、おうち、かえる

女 (笑う) 出勤しないのかよ。

女、あの人、目を合わせて笑う。あの人、はける。

女 そのあとも少し話をしてその日は別れた。結局あの子は会社に行かなかった。
つぎの日から、通学が少しだけ楽しみになった。相変わらず学校はつまらなかったけど。その

人の違和感がなぜだか心地よかった。

その人と会うたびに話をする。あの人、登場。小学生のような恰好をしている。

女 ついにサラリーマンの要素がなくなってしまった。

女 おはようございます。

あの人 おはよー。今日ね、俺（オにアクセント）ね！遊戯王カードでね！

女 頭脳も子供になっていた。

女 そんなのにはまってるんですか

あの人 ちょーすげーんだぜ（小学生のように熱く語る）

女 なんでだろう、そんな話でもあの人のお話を聞くのはとても楽しい時間だった。

ブルー、アイズ、なんだっけ。今度見てみようかな。

話をできないときも多かったけど。

心の声の変な人の恰好ででてくる

女 どこかで見たことがある。こんな時はむり。

あの人 ハッ、1、2、3、バースー！ ハッ

あの人、はける

女 まあ、いまのはおまけ。

女 半年ぐらいして親の都合で急に引っ越しすることになった。行っていた学校に未練はなかったし、別に友達もいなかったから、ふーん、という感じだったけれど、あの人には伝えようかなと思った。

いつも会ってるしね。

しゃべれる日だといいな。

話を切り出せない。あの人、透明なすごい大きい人と手をつなぎながら登場。

女 おはようございます。今日はずいぶん普通ですね。

あの人 （聞いていない。大きい人と話をしている）

女 誰かいるんですか？

あの人 （大きい人を女との間に入れる）

あの人、はける。

女 なんだかわからないものを、間に入れられた。

え、なにこれ、なにこれ。ちょっと！（追おうとするが、間のものにぶつかり）

（間に入れられたものが）あったかい。（去ってしまったのに気づき）・・・あ

女 あんなひとに伝える必要なんてないのだけれど。そう思うほど、一方的でもいいから、伝えなきゃと思って、でもそう思うほど言えなくなった。

女、あの人を待っている。
あの人、登場。

女 (あぐり)
あの人 (赤ちゃんの姿勢で、おしゃぶりを咥えている)
女 (しばらく見ている)
あの人 (気づいたように、おしゃぶりを女に渡す)
女 ありがとう

あの人、はける。

女 (軽く笑いながら) いらない (おしゃぶりを捨てる)

女 結局、話を切り出すことができないまま、最後の日になった。
女 その日に限ってあの方は来なかった。

人の心配がして思わず振り返って声をかけてしまうが別の人。とても変な人

女 ちがう。この人じゃない。

変な人が手紙を渡す。女、手紙を受け取る。

女 あの人からの手紙だった。

ぐじゅぐじゅに書いてある手紙を客面に見せる。

女 全然読めない。何を書いてあるかはわからなかったけど、あの方がきのうでさよならだったんだということはわかった。(捨てたおしゃぶりを拾う) あの方は時をさかのぼり消えてしまったのだ。

女 先にさよならを言われてしまった。

女 (おしゃぶり、手紙をしまう) おかげで5年たったいまでも忘れることができないでいる。

完